

大学生の授業への意識調査

臨床心理学科教授 宮下 照子

はじめに

近年、大学生の学力低下と共に、大学の授業中の態度も私語が多いことや携帯電話でのメールのやり取り等、授業へのモチベーションを欠く事態が多く見られる。また、実習や実験などの必修科目の授業においても、欠席や遅刻が珍しくない状況で、さらに、レポートの提出の著しい遅延もある。大学が大衆化したことで、学生の目的が様々であったり、学生が自身で進学を選択したのではなく、世の流れに任せて大学に入学してきた場合もあり、学生の授業への態度のばらつきとなっていることは否定できない。しかしながら、青年期の大切な時間をより有効にすごさせるためにも、大学教員は現在の学生の意識を正確に把握し、授業の効果を出さなくてはならない。大学生についての最近の書物として、「大学生の自己と生き方」(溝上、2001)や「大学生論」(溝上編、2002)があるが、実際、学生を教える立場の者として、関わる学生の姿を少しでも捉えたく調査を行うことにした。そして、本調査はたとえば、発達的に現代大学生の意識をとらえるような学問的意味をもつものでなく、また、教育改革(たとえば、FD; Faculty Development)のための基礎調査というような大げさなことを目的としているのではない。ただ、実際に授業をしていて、教員の方が困惑する事態が多かったので、まず、大学生が大学の授業を自身の生活の中でどのように位置づけているのかを知りたいと言う

素朴な発想から行ったことである。

方 法

調査1：実験実習を必修科目とする臨床心理学科生への調査である。

1. 調査対象者：佛教大学臨床心理学科生(3回生)61名である。内訳は男子25名(平均年齢21.2歳)、女子36名(平均年齢21.3歳)である。
2. 調査法：調査は秋学期最後の「心理学中級実験」の時間内に調査用紙を配り、実験の合間に回答をさせ、授業時間内に回収した。調査用紙には回答の他は性別と年齢のみを書かせた(無記名)。調査用紙は資料としてこの報告に添付する。質問は次の9つからなる。すなわち、①あなたの生活の中で、大学の授業に出席することは何番目ぐらいの価値ですか。②あなたにとって、興味ある授業とはどのようなことですか。③授業内容がわからない時どうしますか。④イヤな授業の時、あなたはどのようにしますか。⑤あなたが一番欠席しにくい授業はどのようなものですか。⑥授業に遅刻する時はどのような理由ですか。⑦あなたは大学に何の目的で入学しましたか。⑧卒業論文についてどのように考えていますか。⑨卒業論文の指導教員をどのように決めたいと思っていますか。①を除いて、他の質問は下位項目からなり、複数回答ができる。

調査2：臨床心理学科生と他の学部・学科の学生の意識を比較するために、臨床心理学科生以外の学生への調査を行った。

1. 調査対象者：佛教大学文学部生（社会学部生も含まれている）、40名（平均年齢20.2歳）で、これは男子学生のみである（女子学生へも調査を行ったが、人数が少なかったため、今回の集計では削除した。）。この40名と臨床心理学科生40名（平均年齢20.2歳）を比較対照とした。臨床心理学科生40名も男子学生のみで、調査1の3回生25名と新たに加えた2回生15名である。

2. 調査法：他学部生の調査は文学部教員の協力を得て、春学期（6月中）の文学部の選択科目の授業の中で調査を行い、すぐに回収した。臨床心理学科の2回生の調査も同時期に「心理学初級実験」の授業の中で、実験の合間の時間に回答をさせた。調査用紙は調査1と全く同じである（年齢、性別は記載するが、無記名）。

結 果

1. 調査1の結果

表1～表9までが臨床心理学科生（3回生）の男女の結果である。それぞれ質問1～質問9に相当する。表1は質問1、つまり、大学の授業に出席することは生活の中で何番目かの質問である。7番目までの回答があったが、表1のとおり、女子学生は2番目、男子学生は3番目の回答が最も多かった。男女間で有意差（ノンパラメトリック検定、ウィルコクソンの順位検定）は出ていないが、女子学生の方が生活の中で授業の位置づけが男子学生よりも高いようである。

表2の興味ある授業とはどのようなものかの回答では、男女とも、「内容に興味がある」授業に興味があると答えている（ここから以降の質問は複数回答可であるため、全体が100%以上になることもある）。

表1

質問1（出席が生活の中で何番目か）の回答（臨床心理学科生）
（頻度の多いもののみ提示）

何番目	男子学生(%)	女子学生(%)
1番目	20	33.3
2番目	24	41.7
3番目	28	19.4

表2

質問2（興味ある授業）の回答（臨床心理学科生）
〔質問2以降は複数回答のため100%以上になる〕

	男子学生(%)	女子学生(%)
①内容に興味がある	56	72.2
②教員の話が上手	36	61.1
③笑えるほど面白い	20	19.4
④説明が視覚的で理解しやすい	16	11.1

上になることもある。ただし、男子学生は56%であったが、女子学生は72.2%で、圧倒的に女子学生は授業の内容を重視していると言える。

次に、表3は授業の内容がわからないときの対処法の結果である、男女とも「友人に聞く」が最も多く、また男女間で有意差があった（ウィルコクソン検定； $W=668.500, P<.019$ ）。教員には聞きにくいことが明白に示されている。

表3

質問3（授業内容がわからないときどうするか）の回答（臨床心理学科生）

	男子学生(%)	女子学生(%)
①終了後すぐに教員に聞く	8	19.4
②友人に聞く **	68	91.7
③後日、研究室に行って聞く	12	2.8
④イヤになり、欠席がちになる	8	5.6
⑤その他	12	8.3

** $P<.019$

表4のイヤな授業の時の行動であるが、女子学生はイヤな授業の時は寝ているというのが55.6%で最も多く、一方、男子学生はイヤイヤ聞くのが最も多かった。「他の科目のレポートなど、別のことをする」が男子学生は3番目に、女子学生は2番目に多い回答であったが、女子学生の方が男子学生よりも有意に($W=634.500, P < .012$)別のことをしている結果である。

表4

質問4 (イヤな授業の時どうするか)の回答
(臨床心理学科生)

	男子学生 (%)	女子学生 (%)
①欠席する	12	16.7
②寝る	28	55.6
③友人と私語する	12	8.3
④携帯でメールを送る	8	8.3
⑤他の科目のレポートなど、別のことをする **	16	47.2
⑥イヤイヤ聞く	44	33.3
⑦教室を出る	0	0
⑧その他	4	2.8

** $P < .012$

次に、表5の「一番欠席しにくい授業は」の問いに、臨床心理学科生であるので、男女とも、実習、実験系の授業と答えている。しかし、女子学生の方がこの回答が圧倒的に多く、男女差が見出されている($W=668.500, P < .019$)。

表5

質問5 (一番欠席しにくい授業は)の回答
(臨床心理学科生)

	男子学生 (%)	女子学生 (%)
①出欠をとる授業	28	41.7
②実習、実験系のもの **	68	91.7
③出欠をとらないが興味あるもの	8	8.3
④その他	4	0

** $P < .019$

表6は授業に遅刻する時の理由を尋ねているが、「起きにくい」が男女共一番多い回答で、さらに女子学生の方が有意に回答が多かった($W=660.500, P < .049$)。現代の学生も夜更かしが多いのか、夜型なのであろうか。

表6

質問6 (授業に遅刻する時はどのような理由か)の回答
(臨床心理学科生)

	男子学生 (%)	女子学生 (%)
①起きにくい *	44	69.4
②自分の用事	20	27.8
③交通の事情	20	27.8
④授業がイヤだから	8	16.7
⑤遅刻しない	16	13.9

* $P < .049$

表7

質問7 何の目的で大学に入学したかの回答
(臨床心理学科生)

	男子学生 (%)	女子学生 (%)
①就職のため	20	19.4
②技術の修得のため	28	27.8
③学問・研究のため	60	77.8
④友人を作るため	0	11.1
⑤特に目的なし	16	5.6

表7は大学入学の目的についての質問であるが、男子学生が60%、女子学生が77.8%「学問・研究のため」という回答が最も多かった。就職や技術の修得が最も多いと期待したが、建前を重んじたのか、本音なのか、意外な結果である。表8、表9の質問8、9は臨床心理学科生に今回特に必要であるので質問項目に入れた。すなわち、この3回生が一期生となるので、学生の希望を聞きたかった。表8で、卒業論文について、「自分のやりたいテーマを自分なりに研究すること」と回答したのが男女とも最も多かった。その程度が女子学生の方が男子学生を大きく上回っている($W=639.500, P < .009$)。女子学生の方が卒業論文に対する関心が高いようである。表9で、卒業論文の指導教授の決め方の質問であるが、「自分のテーマに

表8

質問8 (卒業論文について)の回答(臨床心理学科生)

	男子学生(%)	女子学生(%)
①自分のやりたいテーマをする ***	56	86.1
②文献などを自分のテーマに沿ってまとめる	28	16.7
③レポートよりもかなり多い量のもの	20	16.7
④その他	0	0

** P < .009

表9

質問9 (卒論の指導教授をどのように決めたいか)の回答 (臨床心理学科生)

	男子学生(%)	女子学生(%)
①自分のテーマに合った教員を選びたい	72	69.4
②自分に合った教員を選びたい **	16	47.2
③教員の側でテーマに合った学生を分ける	8	11.1
④わからない	12	5.6
⑤その他	0	0

** P < .049

合った教員を選びたい」が男女とも最も多い回答であった。次に多かった回答は「自分の好きな教員を選びたい」で、この回答は女子学生の方が、男子学生よりも圧倒的に多かった(W=634.500, P < .012)。

2. 調査2の結果

調査2は調査1と同じ質問であるが、臨床心理学科生と他学部生の結果の比較である。どちらも男子学生の回答結果である。調査1と同様に9項目の質問に対する回答を表で示す。

表10から、臨床心理学科生も他学部生も、授業への出席は生活の中で2番目であるという回答が最も多かったが、1番目から3番目にばら

表10

質問1の回答 (臨床心理学科生と他学部生)
(頻度の多いもののみ提示)

何番目	臨床心理学科生(%)	他学部生(%)
1番目	25	22.5
2番目	30	35
3番目	27.5	30

ついている傾向である。

次に表11では、授業内容に興味があるの回答が最も多く、表2と異なる点は臨床心理学科生の場合、「教員の話が上手」に対する志向が多くなっている。

表11

質問2の回答 (臨床心理学科生と他学部生)
{質問2以降は複数回答のため100%以上になることあり}

何番目	臨床心理学科生(%)	他学部生(%)
①内容に興味がある	64.1	70
②教員の話が上手	51.2	40
③よく笑えるほど面白い	15.4	20
④説明等が視覚的で理解し易い	28.2	15

表12の授業が理解できないときの対処法であるが、やはり、「友人に聞く」が最も多かった。しかし、この対処法は臨床心理学科生の方が多く(他学部生との間には有意差はない)、他学部生は「授業がイヤになり、欠席がちになる」が次に多い回答で、少々消極的ではないかと考えられる結果である。

表13で、イヤな授業の時の行動であるが、「教室を出る」という回答が他学部生の方が有意に(W=1520.00, P < .049)多かった。臨床心理学科生は「イヤイヤ聞く」の回答が最も多く、一方、他学部生は「寝る」の回答が最も多かった。

表12

質問3の回答（臨床心理学科生と他学部生）

	臨床心理学科生(%)	他学部生(%)
①授業終了後すぐに教員に聞く	17.5	12.5
②友人に聞く	70	57.5
③後日、研究室に行つて聞く	7.5	10
④授業がイヤになり、欠席がちになる	10	20
⑤その他	12.5	17.5

表13

質問4の回答（臨床心理学科生と他学部生）

	臨床心理学科生(%)	他学部生(%)
①欠席する	17.5	27.5
②寝る	37.5	45
③友人と私語する	15	15
④携帯でメールを送る	12.5	12.5
⑤他の科目のレポート等をかく	20	22.5
⑥イヤイヤ聞く	50	30
⑦教室を出る *	2.5	15
⑧その他	2.5	2.5

* $P < .049$

表14の「一番欠席しにくい授業は何か」の問いの結果であるが、他学部生は「出欠をとる授業」が最も欠席しにくいと回答し、臨床心理学科生と有意差（ $W=1320.00, P < .001$ ）が出ている。臨床心理学科生はやはり「実習・実験系の授業」が欠席しにくいと回答し、他学部生と有意差が出ている（ $W=1120.00, P < .000$ ）。

表15は授業に遅刻するときの理由についての問いの結果であるが、「起きにくい」の回答が双方共最も多かった。

表16は大学入学の目的を問うた結果であるが、臨床心理学科生は「学問・研究のため」の回答が他学部生よりも有意に多かった（ $W=1420.00, P < .026$ ）。他学部生の方が「技術

表14

質問5の回答（臨床心理学科生と他学部生）

	臨床心理学科生(%)	他学部生(%)
①出欠をとる授業 ***	37.5	75
②実習、実験系のもの ***	72.5	10
③出欠をとらないが興味あるもの	20	35
④その他	2.5	0

*** $P < .001$

表15

質問6の回答（臨床心理学科生と他学部生）

	臨床心理学科生(%)	他学部生(%)
①起きにくい	45	55
②自分の用事	20	17.5
③交通の事情	20	20
④授業がイヤだから	10	2.5
⑤遅刻しない	20	30

表16

質問7の回答（臨床心理学科生と他学部生）

	臨床心理学科生(%)	他学部生(%)
①就職のため	25	32.5
②技術の修得のため	30	37.5
③学問・研究のため **	60	35
④友人を作る	5	17.5
⑤特に目的なし	10	15

** $P < .026$

の修得のため」の回答が最も多いのに反し、臨床心理学科生の「技術の修得のため」の回答の2倍の回答が「学問・研究のため」であるのは少々意外な結果である。

表17、表18は卒業論文についての質問なので、まとめて見てみる。表17では、「自分のやりたいテーマをする」が双方とも最も多い回答であった。これについては臨床心理学科生も他学部生も変わらない意志であろう。表18で、「自分のテーマに合った教員を選びたい」の回答が圧倒的に臨床心理学科生に多く

($W=1360.00, P<.003$)、他学部生の最も多い回答である「自分に合った教員を選びたい」と結果がかなり異なっている。臨床心理学科生は「自分のやりたいテーマ」に対するこだわりが大きいのであろうか。

表17
質問8の回答（臨床心理学科生と他学部生）

	臨床心理 学科生(%)	他学部生(%)
①自分のやりたい テーマをする	65	67.5
②文献などを自分の テーマに沿ってま とめる	25	30
③レポートよりもか なり多い量のもの	17.5	15
④その他	2.5	0

表18
質問9の回答（臨床心理学科生と他学部生）

	臨床心理 学科生(%)	他学部生(%)
①自分のテーマに 合った教員を選び たい ***	75	42.5
②自分に合った教員 を選びたい	35	45
③教員の側でテーマ に合った学生を分 ける	7.5	10
④わからない	10	22.5
⑤その他	0	2.5

*** $P<.003$

考 察

前述したように、本調査は筆者が学生の授業に対する態度に理解しがたいことを感じて行ったものであったが、回答の結果を見ると、特に従来と異なっていたり、奇異な結果は全体として見出されなかった。これは、担当教員がその授業中に行ったものであるのか、実際に思っていることを書かなかったのか、あるいは、むし

ろ誠実に回答したのかかもしれない。学生生活の中で、授業に出席することは2番目のことと回答したことは、従来のデータと変わらない。すなわち、田口（2002）は竹内（2000）の2000人余りの大学生の調査結果を引用し、“大学生生活の中で、もっとも大きな比重を占めているものは、「友人との交友」であるが、その次にくるものは「学業・勉強」であり、この順番は昔の学生と変わらない”と指摘している。ただ、本調査では、学生生活の中で、最大の比重を占めるものを質問していないので、「友人との交友」が第一番目であるかどうかは不明である。また、質問7で、大学入学の目的を聞いているが、その回答の中で、「友人を作るため」という回答は少なかった。すなわち、臨床心理学科生の男子では0%、女子では11.1%であるし、男子の臨床心理学科生と他学部生の比較でも、前者が5%、後者が17.5%となっていて、「学問・研究のため」に比べると、特に臨床心理学科生は少ない回答率になっている。このような結果は質問の仕方に大きく関わると考えられ、学生生活の中での比重順に回答を求める必要もあろう。

本年度の教育心理学会で発表されたものの中でも、本調査と関わりのあるものも少なくなく、学生の授業への態度に対する大学教員の苦悩が窺える。たとえば、「大学生の授業への出席・欠席に関する意識調査—熱心な学生とそうでない学生の違いはどこにあるのか—」（井上、関田、2003）では、熱心な学生は「授業には出席するものだと思っている」、「授業内容が面白い」などの理由が多く、熱心でない学生は「授業内容が面白い」、「先生の教え方が上手い」などの理由付けが低く、授業に対して批判的、否定的であるということである。これは、本調査では「興味ある授業とはどのようなものか」の質問2と比較すると、「内容に興味がある」が圧倒的に多く、次に「教員の話が上手」と続

く結果と同じような意味があると思われる。ただ「面白い」という意味が「興味がある」と解釈してよいのかどうかは明らかでない。本調査では、「面白い」ということを「笑えるほど面白い」と提示し、「興味ある」というのと区別して、むしろ、軽いものとして捉えた。

本調査はデータ数も少なく、また、他学部生との比較で女子学生のデータが少なかったので、分析できていないなどの問題点が残るが、学生の授業への態度を明確にするため、さらに質問の仕方を修正し、データを収集する必要性を感じている。

おわりに

本調査は大学生の授業態度への疑問から、授業担当の教員が行ったものである。授業担当者が調査したと言うことで、少しの偏りはあるかもしれないが、無記名のため、かなり本音を書くことも期待できた。臨床心理学科生について、結果は従来の学生の意識とほとんど変わるものでなかった。3回生を中心にした調査であったので、臨床心理学科の授業内容に慣れてきたことも、新奇的な結果が出なかった一因かもしれない。また、臨床心理学科の授業内容は文系よりも、理系に近いことを考慮すると、理系の他学部生のデータとの比較も必要であると思える。ただ、学生のニーズが様々であることは別にして、学生の授業への態度の問題は、学生に「媚びる」ことのない教員の側の誠実さ、熱心さがかなりの鍵を握っているのではないかと筆者は考えている。

謝 辞

他学部生の調査については、文学部の笹田教彰先生の御協力を得ました。ここに感謝いたします。

付記 本調査結果は第45回日本教育心理学会（大阪市）で発表されたものである。

【参考文献】

- 井上比呂子、関田一彦 2003 大学生の授業への出席・欠席に関する意識調査Ⅰ—熱心な学生とそうでない学生の違いはどこにあるのか—。日本教育心理学会第45回総会発表論文集, P275.
- 溝上慎一編 2001 大学生の自己と生き方。ナカニシヤ出版
- 溝上慎一編 2002 大学生論。ナカニシヤ出版
- 内田 治 2002 すぐわかるSPSSによるアンケート調査・集計・解析。東京書籍

【添付資料】

